

あわら市のやきもの

～先祖の生活を知る手がかり～

1 縄文土器深鉢（縄文時代中期 井江葎）



本資料は、現在では消滅した井江葎貝塚より採集されました。厚手の器壁や半截竹管によってつけられた隆起線文は、縄文時代中期における北陸地方の土器の特徴を表しています。

2 弥生土器長頸壺（弥生時代中期 番田出土）



本資料は戦時中に番田の水田の中から発見されました。この資料は表面に櫛目による整形が施されており、この形式は弥生時代中期に作られたと考えられているところから、この地域に昔から人が生活していたことがうかがえます。またこのような形式を櫛目文土器と呼び、福井県では数少ない出土例となっています。

3 須恵器大甕（古墳時代 清王出土）



北陸街道沿いの清王の南にある丘陵地帯に古墳群があり、その中の1号古墳から出土しました。容量は約100ℓもある当時としては大型品で、古墳の頂上から見つかったことから、祭祀に使われたのではと推測されます。

4 須恵器蓋付壺（奈良時代前半 瓜生出土）



1984年に横山古墳群に近い瓜生地区で発見されました。中には火葬後のお骨が入っていました。その胎土の具合から、地元の柿原にあった須恵器窯で作られたものと推定されています。

5 須恵器短頸壺（奈良時代 井江葎出土）



昭和40年代に丸岡町（現坂井市）の方が井江葎付近で採集した資料です。この地域には多数の古墳がありましたが土砂採取のため、多くが破壊されており、現在ではほとんど残っていません。本資料がその古墳と関わりがあるのかは不明です。

6 須恵器双耳瓶（平安時代 井江葎出土）



井江葎付近で採集された資料です。双耳瓶は北陸地方の須恵器の特色で、耳（取手）の大きさや器形から、平安時代前～中期ごろの資料と考えられます。生産地はその当時近くでこの形を生産していた南越古窯址群か南加賀古窯址群のものと思われます。

7 越前焼壺（鎌倉時代後半 宮谷出土）



この資料が出土した宮谷は、竹田川の支流、宮谷川の上流に位置し、中世においては興福寺領河口荘に含まれていました。本資料は胴の肩位置がやや高めにあるところや、口のつくりから13世紀末ごろの製品と考えられ、県外で越前焼が使われる例が増えてくる時期です。

8 信楽焼壺（江戸時代初期 柿原出土）



本資料は、江戸時代初期に越前国で九頭竜川以北を越前藩主結城秀康より預けられた多賀谷左近三経の墓より出土しました。中には人骨が入っており、調査した結果、熟年期の男性の全身部分骨1体分が確認され、多賀谷左近三経のものであろうと推定されています。

9 越前焼小甕（明治時代 熊坂出土）



ろくろで成形され、表面に化粧土が使われているところから、明治時代に入ってから作られたものと考えられます。この同じ形のもので、富山でも蔵骨器として使われている例があります。